年間第３１主日

福音朗読　マタイ 23・1-12

2023.11.5　9：30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭　高木健次神父

今日、わたしたちは年間第３１主日のごミサをお捧げしておりますけれども、死者の月の最初の日曜日として、高円寺教会の習慣では縁（ゆかり）のある方々のお名前を掲示するということなんです。それでここにお名前に掲示されていて、亡くなった方々を――普段のミサもそうですけれども――特に今日、亡くなった方々を思い起こしながらごミサを捧げるということでございます。

わたしたちはいつも、この地上の歩みを終わった人々と共に神様のみもとに集められているという、そのことをミサのたびごとに表現し、また思い起こし、そこから力をいただくわけなんです。よく、人間は三段階の死を通して死んでいくと言われます。第一段階はこの肉体の死です。そして二番目がその遺体をお墓にお納めする時、そして三番目がその人のことを知っている親しい人たちが亡くなった方のことをもう思い出さなくなる、あるいはその人のことを覚えている人が地上からいなくなる。そういうことを通して、完全にこの地上からいなくなる。そんなふうに言われますけれども、わたしたちの信仰は、この目に見える世界で全てが終わるというわけではない、その希望を抱いていますから、たとえこの地上においてその人のことを覚えている人が誰もいなくなったとしても、その人は神様のもとで神様と共に、この地上を生きている者のために祈り、そして働かれる、ということなんです。それは誰も知らない。でも確かに働いている。聖霊のように、ということになります。

では、ここに今日名前が掲示されている人をはじめとして、わたしたちが覚えている死者はどうでありましょうか。それは、別にまだこの地上に半分引き留められているというわけではなく、今度は、それぞれの生涯の思い出や、その人を思い起こしたときに浮かんでくる姿を通して、天とこの地が繋がっているということを証ししているひとつのしるしです。イエス様がご自分の姿を通して父である神様を証ししたように、一人ひとりの姿を通してその繋がりを、神様と共にやはり一致し祈り働いていらっしゃるということになります。姿を通して――目に見えると言いましょうか――意識される形でイエス様のように働く、また誰も知らないけれども隠れたところで働

く聖霊のように、わたしたちの存在は死を通してイエス様のように、また聖霊のように、この地上との関わりを変えていくということができると思います。

わたしたちの側(がわ)からすれば、そのような、亡くなった方々、親しい方々、またわたしたちの知らない多くの死者が神様と共に在る、そのことを思い起こすときに、すべての命が神から来る、そして神様に属するものなんだということを、命の前に、またその命をいただいて歩んだ一人ひとりの生涯の前に尊敬の心をもって、まことの謙遜な態度で頭を下げると言いましょうか、もうわたしたちが良いとか悪いとか判断することはない、ほんとに神様の恵みのうちに命をいただき、そしてそれを生きたっていう、その一人の人がいるっていうことそのものが偉大な神秘であるということを受け入れて、まさに神様の前に沈黙して礼拝するというのが相応しい態度なんだと思います。

それと同時に、一人ひとりが自分の命も、そして他の人の命も含めて、自分の手の中にあるものではないのだと、人間が自分の都合で勝手に操作したりしてはいけない神様に属する神聖なものであるということを改めて思い起こすということも大切だと思います。人類全体としてもそうです。わたしたちが、人類が、その神様の領域に踏み込み、また他者の命を自分の都合で左右できる何か付属物のように思ったり、あるいは自分自身の命を自分の思いによって自由にできると思う、そういうまことの傲慢からの解放も互いに祈り合う、そのことにも、信仰を通して招かれているのではないかと思います。

わたしたちが、今日、主日のミサの中ではありますけれども、死者の月の最初の日曜日として親しい方々を思い起こしながらごミサをお捧げする、その時に、この地上を歩んだすべての人の生涯に尊敬の心を持つことができますように、そしてまた神様の与えられる命という賜物(たまもの)の前にまことの謙遜をもってそれを受け取る、その思いを新たにしながら、共にこのごミサをお捧げしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。
PC　http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi
携帯　http://www.koenji-catholic.jp/mobile/